

長柄町刑部勝蔵寺裏横穴群

— 地域自主戦略交付金(道路)委託埋蔵文化財調査報告書 —

平成24年9月

千葉県県土整備部

公益財団法人 千葉県教育振興財団

な がら まち おさか べ しょう ぞう じ うら よこ あな ぐん

長柄町刑部勝蔵寺裏横穴群

— 地域自主戦略交付金（道路）委託埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第690集として、千葉県県土整備部による、主要地方道市原茂原線（刑部）道路改良事業に伴って実施した、長柄町刑部勝蔵寺裏横穴群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世以来連綿と営まれてきた長柄町刑部地区の勝蔵寺と関連して、やぐら跡や石塔類などの遺構・遺物が発見され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年9月30日

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 渡 邦 清 秋

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による県道市原茂原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、長生郡長柄町刑部字八幡谷 2074-5 ほかに所在する刑部勝藏寺裏横穴群（遺跡コード 264-006）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受けて、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の実施期間及び担当者は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆及び編集は、主任上席文化財主事 四柳 隆が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部長生土本事務所、長柄町教育委員会、小高春雄氏の御指導、御協力を得た。また、発掘調査の実施にあたっては、勝藏寺檀家総代神崎好功氏より多大なる御協力をいただいた。
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第2図	国土地理院発行	1/25,000 地形図「海士有木」(NI-54-19-16-1)
	国土地理院発行	1/25,000 地形図「鶴舞」(NI-54-19-16-2)
第1・9図	長柄町発行	1/2,500 地形図No.19
- 8 本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。

図版1	京葉測量株式会社撮影	(平成20年2月)
-----	------------	-----------
- 9 本書で使用した図面の方針はすべて座標北であり、測量系は日本測地系による。

本文目次

序 文

凡 例

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1. 調査に至る経緯と経過.....	1
2. 調査の方法.....	4
第2節 遺跡の位置と環境.....	5
1. 遺跡の位置と地理的環境.....	5
2. 周辺の遺跡と歴史的環境.....	6
第2章 検出された遺構と遺物.....	7
第1節 遺構.....	7
1. やぐら.....	7
2. 台地整形遺構.....	10
3. その他の遺構.....	15
第2節 遺物.....	19
1. 石塔類.....	19
2. 銭貨.....	21
3. その他の遺物.....	21
第3章 まとめ.....	22
第1節 中世の遺構と遺物.....	22
1. やぐら.....	22
2. 石塔類.....	23
第2節 刑部地区の中世後期の景観.....	23
第3節 遺跡の名称と横穴群.....	24
報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査範囲と周辺の地形.....	3	第7図 ST-001	12
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	5	第8図 ST-006	14
第3図 ST-003 (1)	7	第9図 遺構配置図	17
第4図 ST-003 (2)	8	第10図 出土遺物 (1) 石塔類	20
第5図 ST-004	9	第11図 出土遺物 (2) 銭貨	21
第6図 ST-005	11		

表目次

第1表 遺構番号対照表.....	4
------------------	---

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真	図版6 ST-001、ST-006～008、SI-001、SK-001、 SK-002、SK-003、SK-004、SK-005
図版2 遺跡遠景、ST-003・004・005	図版7 出土遺物 (1) 石塔類
図版3 ST-003～005 前庭部、ST-006 前庭部	図版8 出土遺物 (2) 銭貨・その他の遺物
図版4 ST-003、ST-004、ST-005	
図版5 ST-004、ST-005	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

千葉県県土整備部は、市原市と茂原市を結ぶ主要地方道である県道市原茂原線の交通量の増加から、道路拡幅及びバイパス工事による道路改良を計画し、事業の実施に先立って事業区域内の路線上に所在する埋蔵文化財の所在の有無について、千葉県教育委員会に照会した。事業区域内には周知の遺跡が複数所在することから、その取り扱いについて千葉県教育委員会と千葉県県土整備部との間で慎重な協議が重ねられた結果、現状保存が困難な地点についてはやむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、発掘調査は公益財団法人千葉県教育振興財團に委託して実施することになった。市原茂原線道路改良事業は市原市域においては千葉県市原土木事務所が、長生郡においては千葉県長生土木事務所が管轄している。市原土木事務所管内では、市原市新巻遺跡群の調査が終了してすでに報告書も刊行したところであり（千教振2009）、また現在、磯ヶ谷バイパスの建設工事に伴って市原市松崎中里遺跡の調査が断続的に進捗している。長生土木事務所管内では、長柄町後領遺跡・市神遺跡の調査が終了し、いずれも報告書は刊行済みである（千教振2008）。

本書で報告する長柄町刑部勝藏寺裏横穴群は、長生郡長柄町刑部字八幡谷2074-5ほかに所在する。発掘調査は平成23年度と平成24年度の2次にわたりて実施し、平成24年度の調査終了後、引き続き整理作業と報告書刊行の作業を行った。発掘調査から整理作業・報告書刊行の実施期間・組織と担当者・作業内容は以下のとおりである。

平成23年度

期間	平成23年12月1日～平成24年1月15日	(発掘 本調査)
組織	調査研究部長 及川淳一	中央調査事務所長 白井久美子
担当者	上席研究員 鶴沢正則	
内容	調査対象面積 640m ²	
	本調査 上層 640m ²	

平成24年度

期間	平成24年5月7日～平成24年5月31日	(発掘 確認・本調査)
	平成24年6月1日～平成24年7月31日	(整理)
組織	調査研究部長 関口達彦	調査2課長 橋本勝雄
担当者	主任上席文化財主事 四柳 隆	
内容	調査対象面積 2,650m ²	
	確認調査 上層 490m ² ／ 490m ²	
	本調査 上層 200m ²	
	整理作業 水洗・注記～報告書刊行・移管整理	

刑部勝蔵寺裏横穴群の調査は、多くの糸余曲折を経ながら進捗した。平成 22 年度に実施した現地踏査の段階では、勝蔵寺本堂の周辺と墓地をのぞいて伐採が行われておらず、雜木や真竹・篠竹などが繁茂した状態であった。そのようななか、勝蔵寺本堂より 1 段上の、小さなテラス状を呈する地形付近で横穴状の岩窟 1 か所とほぼ垂直に整形された部分 1 か所を確認し、さらに丘陵頂部で緩やかながら墳丘状に高まっている部分を確認した。標高は勝蔵寺本堂の建つ平坦面が約 40 m、1 段上のテラス状の部分が約 50 m、丘陵頂部が 60 m 弱である。これらの結果から、平成 23 年度の調査着手前には、テラス状の平場部分に古墳時代の横穴 2 基と、丘陵頂部に墳丘 2 基の存在を想定した。丘陵頂部の墳丘は、横穴墓群の構築された斜面の上部に塚状に築かれた高まりを想定したものである。なお、遺跡は上総層群の砂岩層上に立地し、関東ローム層の堆積がみられないことから、下層は調査対象外となった。

平成 23 年度の調査は、当初この横穴 2 基 (600m²) を対象に着手した。しかし調査が進捗するにつれて、左側の 1 基は崖面を整形して小規模な平場を造成した遺構 (ST-001)、右側の 1 基は雨水や流水などによって自然に形成された小規模な岩陰状の地形 (ST-002) である可能性が高いことがわかつた。

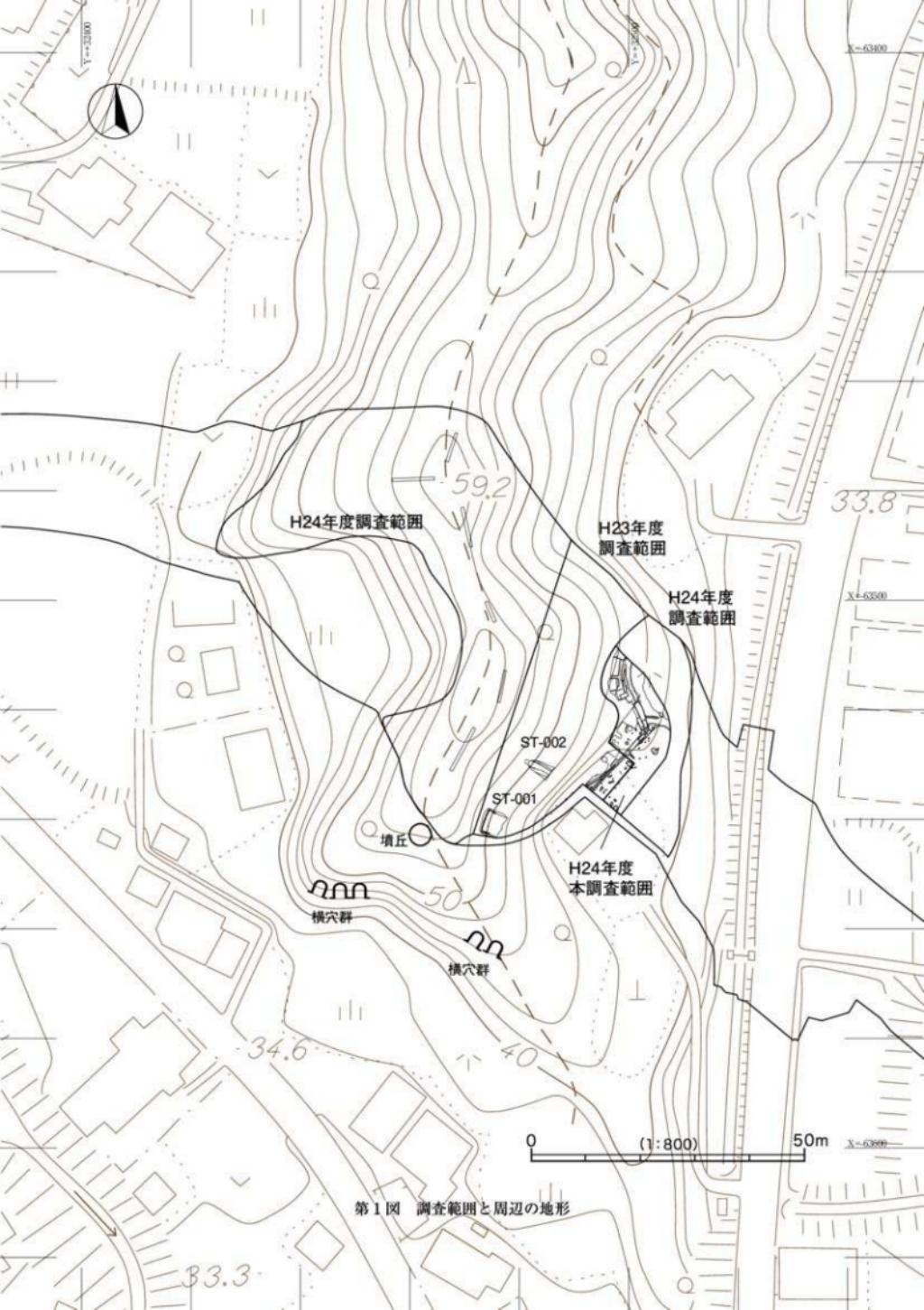
一方この調査中にも伐採作業は進み、勝蔵寺本堂の北側の崖面に 3 基～4 基の横穴が開口しているのが発見された。これらは形状や工具痕の特徴から古墳時代の横穴ではなく、中世以降に穿たれたやぐらと判断された。当初想定していた 2 基が横穴でないことが判明し調査力量が減じたことから、新発見のやぐらのうち南端の 1 基 (ST-003) とその前面 40m²を調査対象として追加することになった。

平成 24 年度の調査は、丘陵頂部の墳丘状の高まり 2 基 (2,160m²) と残る 3 基のやぐらが対象となった。また、平成 23 年度に追加調査となったやぐらの前面で、やぐらに関連すると思われる土坑や溝状遺構が複数検出された。これを受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が平成 24 年 2 月にやぐら前庭部の平場について試掘を行ったところ、さらに溝状遺構や土坑が存在することが確認されたため、前庭部 490m²が上層確認調査の対象として追加された。調査は 6 月中旬までの 1 ヶ月半の予定で開始した。

丘陵頂部は幅の極めて狭小なやせ尾根状を呈しており、急斜面で重機の昇降も不可能であったことから、人力によるトレチ調査によって墳丘状の高まりの性格や範囲について把握することとした。トレチは、2 か所の高まりを中心に木根を避けるように放射状に 6 本設定した。トレチの幅は 60cm、長さは任意である。調査の結果、いずれのトレチでも表土腐植土層下約 20cm でオリーブ褐色を呈する山砂層に達し、人為的な盛り土などの痕跡は確認できなかった。遺物もまったく出土しないことからこれらの高まりは自然地形であると判断し、その結果、調査期間は 5 月末までの 1 ヶ月間に短縮された。なお、今回の調査対象範囲の南側、丘陵先端部には直径約 5 m、見かけの高さ 1 m ほどのお椀を伏せたような高まりがあり、人為的なもの可能性が高いようにみえる。崖下には、概ね南向きに 5 基の横穴が開口している。

勝蔵寺本堂と同一面に開口するやぐらのうち、2 基 (ST-004・ST-005) は平成 23 年度に調査した 1 基と並んで東向きに開口しており、関連する遺構であることは確実である。もう 1 基は北西側に 7 m～8 m 隔てた崖面で検出されたもの (ST-006) で、調査前には大半が埋没しており形状や規模は不明であったが、わずかに観察できる崖面からは ST-001 のような崖面を整形した遺構のように思われた。調査の結果、この付近は後世に大きな改変を受けている可能性が高いことが判明したが、詳細は後述する。

これらのやぐらの前庭部については、490m²と狭小な範囲であることから重機を使用して全面表土除去を行い、遺構の所在を確認した。その結果、前庭部先端の斜面肩部付近からは遺構が検出されなかつたため、やぐらの前面を中心とする 200m²について上層本調査を実施した。



第1図 調査範囲と周辺の地形

2. 調査の方法

調査にあたっては、調査対象が横穴ややぐらといった立体的な遺構であることから、調査区（グリッド）の設定は行わずに各遺構について主軸方向に合わせて2点の基準点を設置し、電子平板による実測を行った。基準点の名称は、遺構番号と枝番を組合せ、手前側を-1・奥壁側を-2とした。たとえばST-001の基準点は手前側が-1-1・奥壁側が-1-2、ST-004では手前側が-4-1・奥壁側が-4-2となる。基準点は6基×2点の計12点を設置した。基準点の設置と電子平板実測は、有限会社無限測量設計に委託して実施した。

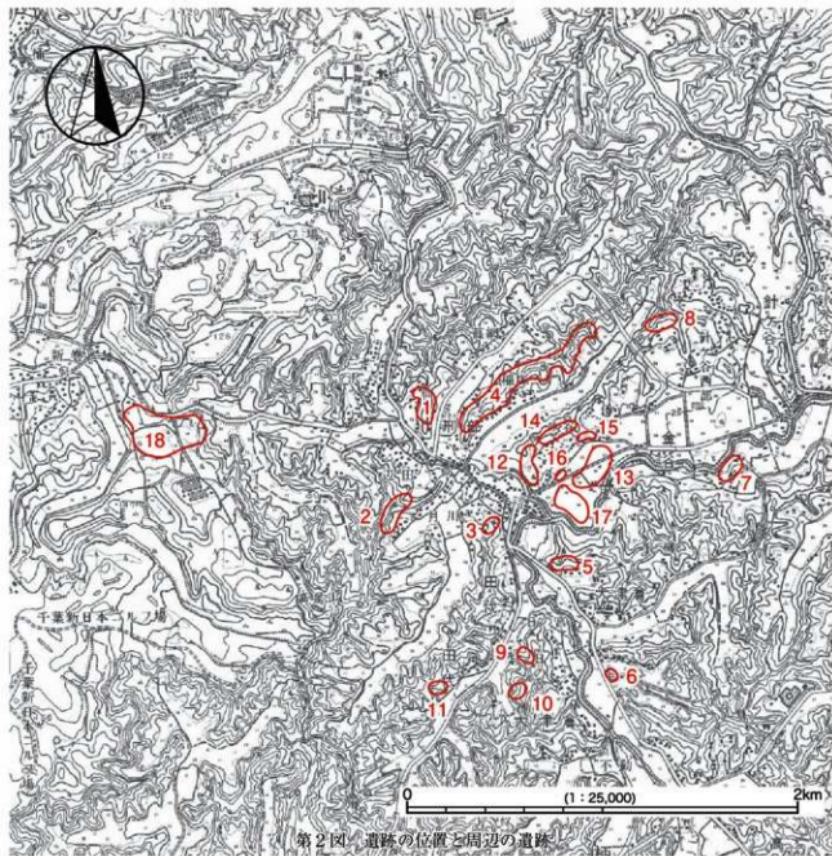
丘陵頂部の調査では、トレント調査の結果遺構・遺物は検出されなかったことから、トレントの位置を記録するのみの作業となつたが、最寄りの基準点である-1-1や-2-1とも10m近い標高差があり、通常の平板実測や従来の方法によるレベルの計測是不可能であった。そこで、当財団が平成23年度より順次導入を進めている遺構実測支援システム（株式会社CUBIC製「遺構くん」）を使用して位置図の作成を行った。

やぐら前庭部の調査では、ST-003～ST-006の基準点3-1・4-1・5-1・6-1を使用して個別の遺構実測図や遺構配置図の作成を行った。これらの実測は通常の平板実測と遺構実測支援システムを併用して実施し、整理作業の段階でパソコンに取り込んで合成・編集した。

調査の結果、やぐら3基、台地整形遺構4か所、竪穴状遺構1基、土坑5基、溝状遺構8条、小ピット約30基が検出されたが、これらについて報告するにあたって、整理作業の段階で遺構を分割したり、あらたに遺構番号を付したり、調査時の遺構番号を整理したりする必要が生じた。やぐら3基と台地整形遺構2か所については、電子平板による実測を委託したところであり、個別に図示する必要があることから調査時の遺構番号を踏襲したが、その他の遺構については個々に図示することはせず、遺構配置図によることとした。新旧の遺構番号の対照は、やぐらと台地整形遺構も含めて第1表を参照されたい。

第1表 遺構番号対照表

報告No	調査次	調査時No	遺構種別	位置	備考
ST-003	(1)	ST-003	やぐら	本堂裏の崖面	納骨穴あり=(1) P-001
ST-004	(2)	ST-004	やぐら	本堂裏の崖面・ST-003の北	納骨穴あり
ST-005	(2)	ST-005	やぐら	本堂裏の崖面・ST-004の北	納骨穴あり
ST-001	(1)	ST-001	台地整形遺構	本堂の1段上のテラス	
ST-006	(2)	ST-006	台地整形遺構	本堂裏の崖面・ST-005の北西	勝成寺崖東と関係あり?
ST-007	(2)	—	台地整形遺構	ST-006の南東	勝成寺崖東と関係あり?
ST-008	(2)	—	台地整形遺構	ST-007の南東	勝成寺崖東と関係あり?
SI-001	(2)	—	竪穴状遺構	ST-005内の北西・SK-003の南	
SK-001	(1)	P-002	土坑	ST-003内の前面	
SK-002	(2)	SK-001	土坑	ST-004・005の前面	
SK-003	(2)	SK-002	土坑	ST-003～005の前底部東端	
SK-004	(2)	SK-003	土坑	ST-005の北西・SI-001と重複	
SK-005	(2)	SK-004	土坑	ST-003～005の前底部北端	
SD-001	(1)・(2)	SD-001	溝状遺構	ST-003～005の前面	
SD-002	(1)・(2)	SD-001	溝状遺構	ST-003～005の前面	
SD-003	(2)	—	溝状遺構	ST-004の前面・SD-001から派生	
SD-004	(2)	—	溝状遺構	SK-004の南東・SD-001から派生	
SD-005	(2)	—	溝状遺構	SK-004の南東・SD-001から派生	
SD-006	(2)	—	溝状遺構	SK-004の北東・SK-004から派生	
SD-007	(2)	—	道路状遺構	ST-006の前面	
SD-008	(2)	—	道路状遺構	ST-006の前面・SK-004から派生	
(1)	ST-002			本堂の1段上のテラス・ST-001の北	自然地形のため抹消
(1)	P-001			ST-003内	ST-003に含め抹消
(1)	P-003	小ピット			個別報告なし
(2)	P-004			ST-004内	ST-004に含め抹消
(2)	P-005			ST-005内	ST-005に含め抹消
(2)	P-006	小ピット			個別報告なし
(2)	P-007	小ピット			個別報告なし
(2)	P-008	小ピット			個別報告なし
(2)	P-009	小ピット			個別報告なし



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 刑部勝寺裏横穴群
2. 刑部・月川横穴群
3. 刑部・八重垣神社横穴
4. 刑部・稲塚横穴群
5. 大津倉長柳横穴群
6. 避免横穴
7. 金谷・畠山横穴群
8. 金谷・小金谷横穴群
9. 日陰横穴
10. 向井横穴群
11. 越田横穴群
12. 後須道跡
13. 市神道跡
14. 卯ノ沢北遺跡
15. 卯ノ沢南遺跡
16. 吹谷前道跡
17. 北一丁目遺跡
18. 新巻道跡群

第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

刑部勝寺裏横穴群の所在する千葉県長生郡長柄町は、千葉県のはば中央部やや南寄りに位置し、県都千葉市の中心部からは南東に約20km、長生郡の中心都市である茂原市の中心部からは西に約6kmを隔てている。行政的にみると、東側は茂原市と、北から西側は市原市と、南側は長生郡長南町と市町境を接し

ている。日本エアロビクスセンターやアウトレット（2009年に閉園・現在はショッピングセンター）の誘致など観光・リゾート目的の開発行為も散見されるが、産業の中心は農業であり、町内の広い範囲にわたりておだやかな丘陵とのどかな田園の融合した里山風景が展開している。人口は約7,800人で、20世紀末頃をピークに減少傾向であり、過疎化・高齢化がすすんでいる。

地形的にみると、刑部勝蔵寺裏横穴群の立地する丘陵は上総丘陵の東部に属し、地質的には下総層群と上総層群の境界付近にある。標高173mの権現森から続く丘陵は一宮川の最上流部とその支流によって樹枝状に深く開析され、丘陵先端は標高60m～70mの狭小なやせ尾根状になっている。水田面との比高差は30m～40mと大きい。今回の調査対象地は、南に向かって延びる丘陵先端部付近の頂部と、その東側斜面に形成されたテラス状の平坦面にある。丘陵の裾部には一宮川の小支流が南流し、勝蔵寺の下で東に転じて200mほど流れ一宮川の本流に合流する。遺跡付近の標高は、丘陵頂部で56m～59m、ST-001とST-002のある面で49m～50m、勝蔵寺本堂とST-003～ST-006のある面で40m～41m、丘陵裾部の水田面で30m～32mである。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

長柄町、ひいては東上総地域を特徴づける遺跡として、古墳時代後期の特徴的な葬制である横穴があげられる。刑部勝蔵寺裏横穴群は平成22年度の現地踏査を経て新発見とされた遺跡で、結果的に横穴ではなかったものの、このような地域の特徴から判断され認定された遺跡名である。5kmほど東には国指定史跡長柄横穴群があり、刑部地区・金谷地区・大津倉地区に限ってみても刑部・月川横穴群（3基）、刑部・八重垣神社横穴（1基）、刑部・稲塚横穴群（9基）、大津倉長柳横穴群（3基）、道免横穴（1基）、金谷・畠山横穴群（3基）、金谷・小金谷横穴群（5基）、日陰横穴（1基）、向井横穴群（2基）、越田横穴群（5基）など、多数の横穴及び横穴群が周知されている。詳細は後述するが、刑部勝蔵寺裏横穴群でも、今回の調査範囲内では横穴は検出されなかつたが、丘陵先端の南側崖面で5基の横穴の存在が確認されている。

もうひとつ、長柄町刑部周辺は中世前半期に上総鎧物師の本拠地のひとつとなった地域である。詳細は不明ながら、後領遺跡、卯ノ沢北遺跡、卯ノ沢南遺跡、吹谷前遺跡、北一丁目遺跡などでスラグの出土が確認されており、市神遺跡の調査では坩堝の破片や鍛冶滓、鍛冶炉の炉壁などが出土している。「吹谷前」という小字は鎧物師と関連するとみられる。また、後領遺跡の発掘調査では戦国時代末期の城跡に伴う遺構が検出されて、報告書で「刑部城」と呼ぶことが提唱された。長南武田氏との関連が指摘されている。

参考文献

- 長柄町教育委員会 1987『千葉県長生郡長柄町埋蔵文化財分布地図 埋蔵文化財包蔵地所在地図』
千葉県教育委員会 1999『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) - 千葉市・市原市・長生地区(改訂版)』
(財)千葉県教育振興財團 2008『主要地方道市原茂原線(刑部・金谷)道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』
-長生郡長柄町後領遺跡・市神遺跡-』
(財)千葉県教育振興財團 2009『住宅市街地基盤整備委託(埋蔵文化財調査)報告書-市原市新巻遺跡群-』

第2章 検出された遺構と遺物

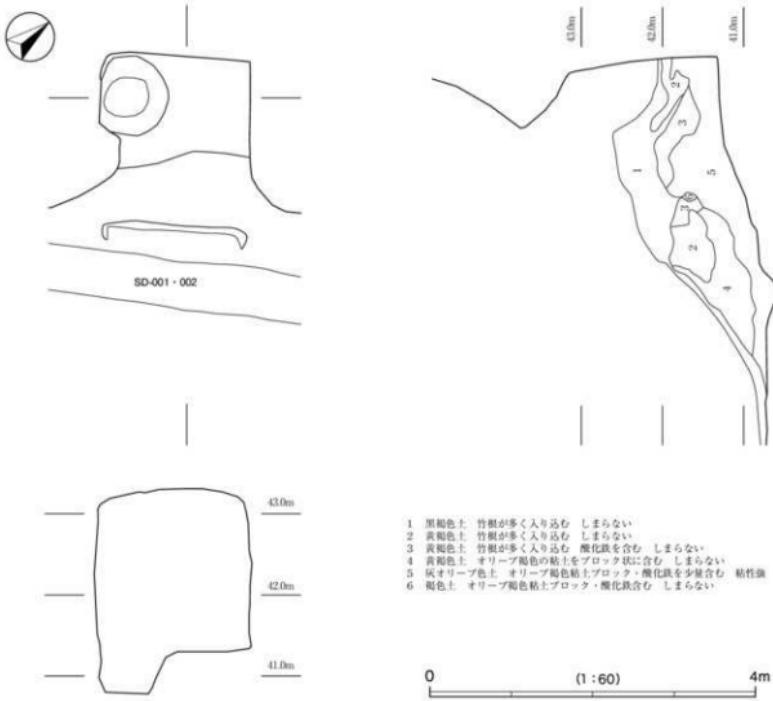
第1節 遺構

1. やぐら

調査の経過の項でもふれたとおり、平成23年度の発掘調査中、勝蔵寺本堂の裏から北側に続く崖面で3基の横穴が開口しているのが発見された。このうち1基は平成23年度の調査に追加して、残る2基は平成24年度に調査することとなった。これらの横穴は、その形状や工具痕の特徴から古墳時代の横穴とは考えられず、寺院境内の崖面にならんで穿たれていること、前庭部の平坦面に散乱する遺物のなかに中世までさかのぼると考えられる石塔類が含まれていることなどから、中世に構築されたやぐらであると判断した。

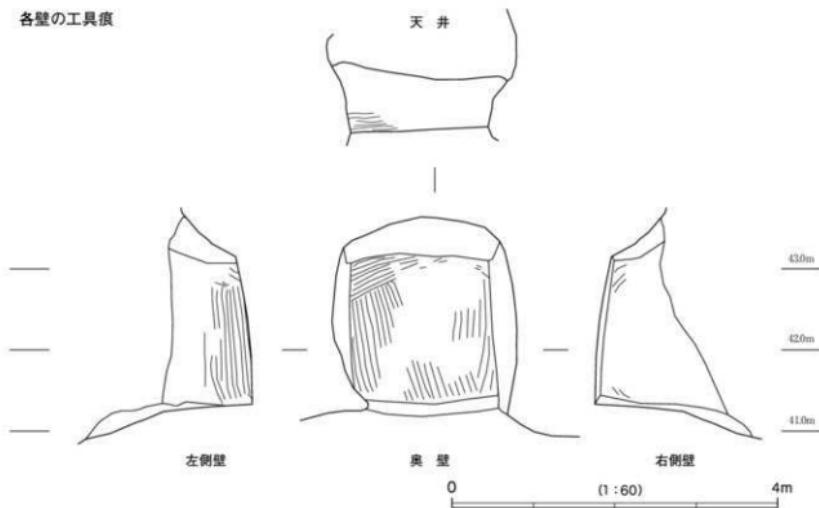
ST-003（第3・4図、図版2・4）

3基のなかで最も南側、すなわち勝蔵寺本堂に最も近い位置に開口しており、平成23年度に前庭部の40mとあわせて調査したやぐらである。調査前には大量の土砂が流入しており、その前面に密に繁茂する



第3図 ST-003 (1)

各壁の工具痕



第4図 ST-003 (2)

真竹のためわずかに岩廻が確認できる程度であった。

底面はほぼ平坦で、幅1m 92cm、奥行きは底面で1m 35cm、岩廻からで86cm、高さは奥壁部分で1m 83cm、岩廻部分で2m 43cmを測る。天井はゆるやかなアーチ状を呈する。工具は先の尖った整状の金属製品と思われ、工具痕は奥壁と左側壁に顕著に残っている。天井と右側壁にはあまり残っていない。

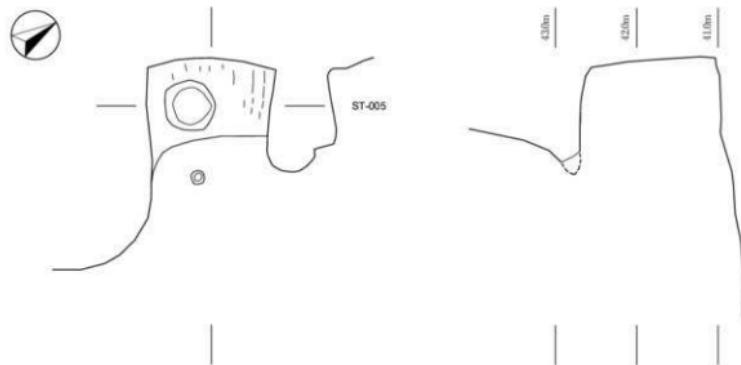
左側壁際の底面に長径96cm、短径85cm、深さ50cmの略円形の土坑が掘られている。この土坑はほとんどが岩廻の内側にあり直接雨が吹き込む位置ではないが、降雨後には岩肌からしみ出した水が溜まる。覆土は、極めて粘性の強い、やや灰色がかった黒色土であった。この円形土坑を伴う点は、今回調査したやぐら3基に共通する特徴である。

やぐら前面から前庭部へと下がる緩斜面には方形の階段状の掻き取りがあり、その直下をSD-001・SD-002とした溝状造構が横断しているが、ST-003との関係は不明である。

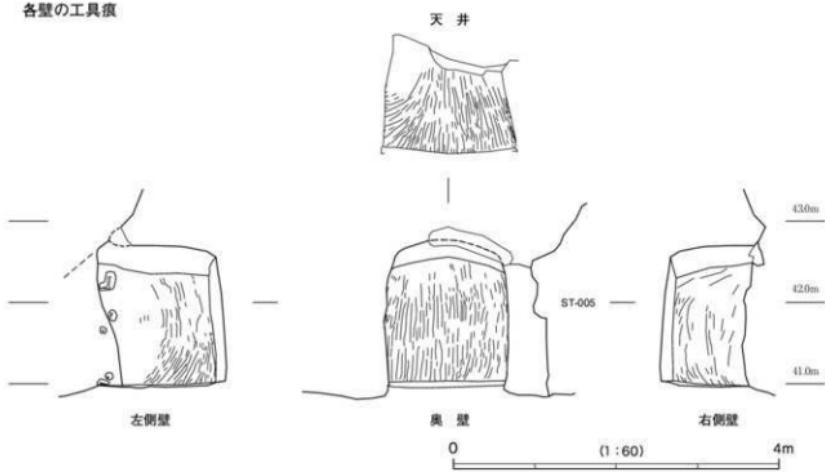
遺物は、五輪塔の火輪2点、宝篋印塔の基礎1点、寛永通寶1点のほか、陶磁器類が出土している。五輪塔と宝篋印塔は15世紀から16世紀の所産であるが、寛永通寶はもちろん、陶磁器類もすべて近世以降のものであった。遺物の詳細は後節で報告する。

ST-004（第5図、図版2・4・5）

ST-003の2mほど北側に位置する。土砂の流入はやぐらの下半分程度にとどまり、調査前から天井部の形状は比較的の観察しやすかったが、流入土内には真竹の根がびっしりと入り込んでおり、堆積土断面の観察はおろか、半截して調査することも断念した。細かい根の入り込んだ覆土は厚いカーペット状となり、これを剥ぎ取ると底面が露出するという状態であった。



各壁の工具痕



第5図 ST-004

今回調査した3基のなかでは、最も整った形状を呈する。底面は平坦で幅1m68cm、奥行きは底面で1m03cm、岩窟から最大1m55cm、高さは奥壁部分で1m53cm、岩窟付近の最も高いところで1m72cmである。天井は整ったアーチ形を呈する。工具痕は奥壁・両側壁・天井とも顕著に残っており、工具はST-003と同様尖鋭な鑿状の金属製品と思われるが、ST-003に比して細く、細かい痕跡として残っている。左側壁の岩窟直下付近には、門痕の可能性のある小穴が残っている。

底面の中央やや左寄りには、径約60cm、深さ50cmの整った円形の土坑が掘られている。こちらの土坑は降雨後にも溜水することはなかった。覆土は極めて粘性の強い漆黒色土の單一層であった。

先述のような状態で堆積土がほとんど遺存しておらず、底面の土坑も含めて遺物は出土しなかった。

ST-005（第6図、図版2・4・5）

ST-004の北側に隣接して開口しており、両者間の距離は1mに満たない。土砂の流入量はST-004よりもさらに少なく、底面の特徴を除いては調査開始前からよく観察することができた反面、やはり真竹の根の影響で断面観察は断念せざるを得なかった。

本やぐらは、底面は平坦で傾斜変換せずに緩やかに前庭部にむかって下がっているが、正面からみると左側が大きく右側が小さいという不整形を呈している。右側だけをみると岩窟付近の高さが1m49cm、岩窟からの奥行き1m04cmと、やや小ぶりながらST-004と類似する規模と形態であるが、左側は岩窟付近の高さが2m20cmとかなり高い。当初はST-004とよく似た形態であったが、何らかの理由で左側を拡張したものと思われる。これは横断面図に如実に表れており、右側約1/3は整ったアーチ形を呈するのに対し、左側は整形が粗くデコボコしている。左側壁から50cm～60cmの奥壁は右側よりも10cmほど奥まで削っており、底面から50cmほどの部分を30cm四方ほどの台形に掘り残している。何らかの彫刻を施すためであろうか。工具痕は各面に残っており、ST-004と同様の特徴を備えている。奥壁の工具痕をみると左上と右下の間にわずかな空白部分があり、そこを境に方向が若干異なっていることも、右と左の掘削時期に差があることを示しているのであろう。

底面には径75cm、深さ65cmほどの円形の土坑があり、土坑を開むようにL字形に小溝が掘られている。なお、この土坑はST-003・ST-004と異なって完全に岩窟より外側にあり降雨時にはすぐに水が溜まったが、右側壁の延長線よりは内側であり、付近に断層が走っていることから岩窟の崩落の可能性も考えられるので、構築当初からやぐらの外であったかどうかはわからない。覆土は極めて粘性の強い黒色土の單一層であった。

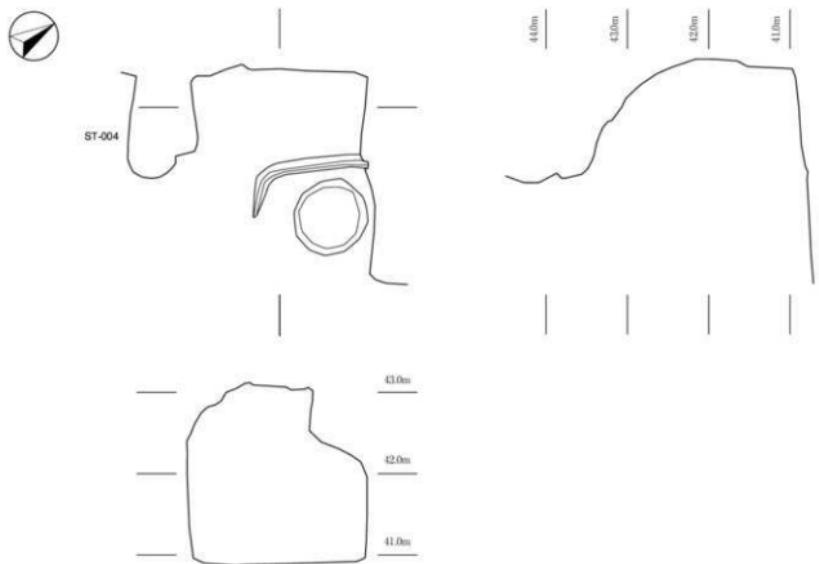
遺物は、土坑内から近世陶磁器の細片が数点出土したのみである。

2. 台地整形遺構

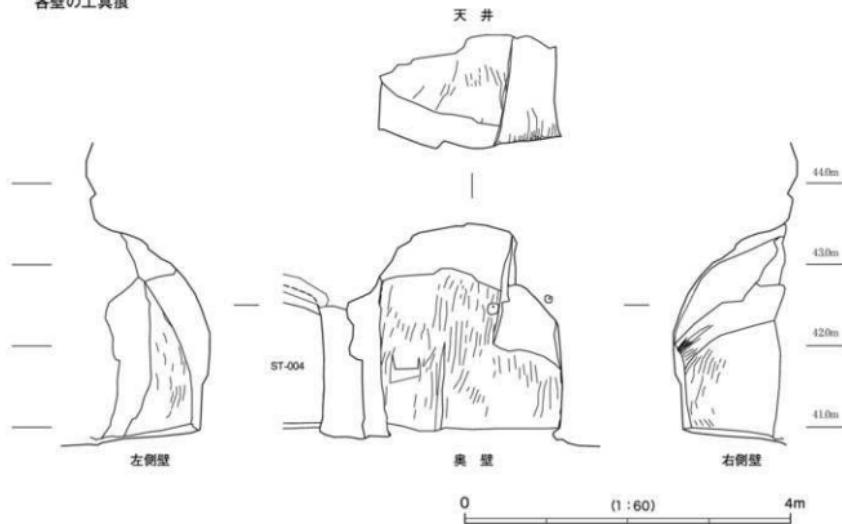
平坦面を作出するために、丘陵斜面や崖面を整形した痕跡を台地整形遺構と称して報告する。一般に中世の屋敷地などを造成する目的で行われた「台地整形区画」とは異なるもので、五輪塔や宝篋印塔といった墓塔類を並べて祀った場所を想定している。

ST-001（第7図、図版6）

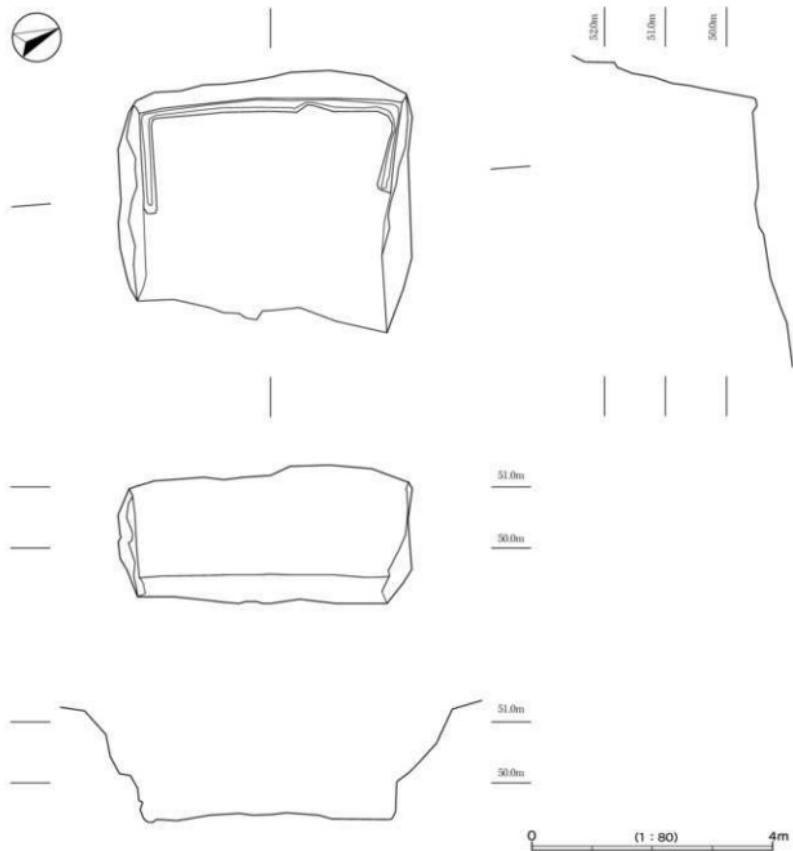
現地踏査の段階で、篠竹や雑草が繁茂するなか、周囲の斜面と異なって垂直に近い角度で立ち上がる岩



各壁の工具痕



第6図 ST-005



第7図 ST-001

盤が確認され、古墳時代の横穴墓の開口部付近である可能性が高いという判断から調査対象となった。位置は勝藏寺本堂が建つ平坦面より1段上の小さなテラス状の部分にあたり、標高は約50mである。なお、ST-001の北側約12mのところで岩廟を検出しST-002として調査したが、自然に形成された岩陰状の地形であったことは、調査の経過の項で述べたとおりである。

調査の結果横穴は検出されず、丘陵斜面を整形して方形の平場を造成した遺構であることが判明した。整形の規模は、掘り方上端で幅4.7m、奥行き4.2m、作出された平場は幅4.0m、奥行き3.8mを測る。平場の奥壁側と両側壁奥側の周縁には、幅約20cm、深さ10cm弱の周溝ともいべき小溝がコの字形に掘られている。底面には3か所に小さな落ち込みが確認されたがごく浅く、柱穴や火葬骨を埋葬したという

規模のものではない。

本項の概要で述べたとおり石塔類を並べて祀った場所である可能性が高いと思われるが、かたづけられたためかそれらは出土していない。遺物としては、寛永通寶5点のほか、近世の陶磁器がわずかに出土している。

ST-006（第8図、図版6）

ST-005の北西側7m～8mを隔てた位置で検出された。調査前にはほとんど埋没しており、わずかに垂直に近い角度で立ち上がる岩盤が観察できるのみであったが、ST-003～ST-005と同じレベルにあること、やや広い前庭部の平坦面があることなどから、この岩盤面にやぐらが開口している可能性と、ST-001のような平坦面を造成するための台地整形遺構である可能性の両面から調査を開始した。なお、前庭部平坦面には真竹や篠竹が密生しており表土層中に大量の根がはびこっていること、その上に伐採作業時の重機作業用通路の盛り土が行われていることなどから、底面の岩盤を検出する直前まで重機によって掘削を行った。

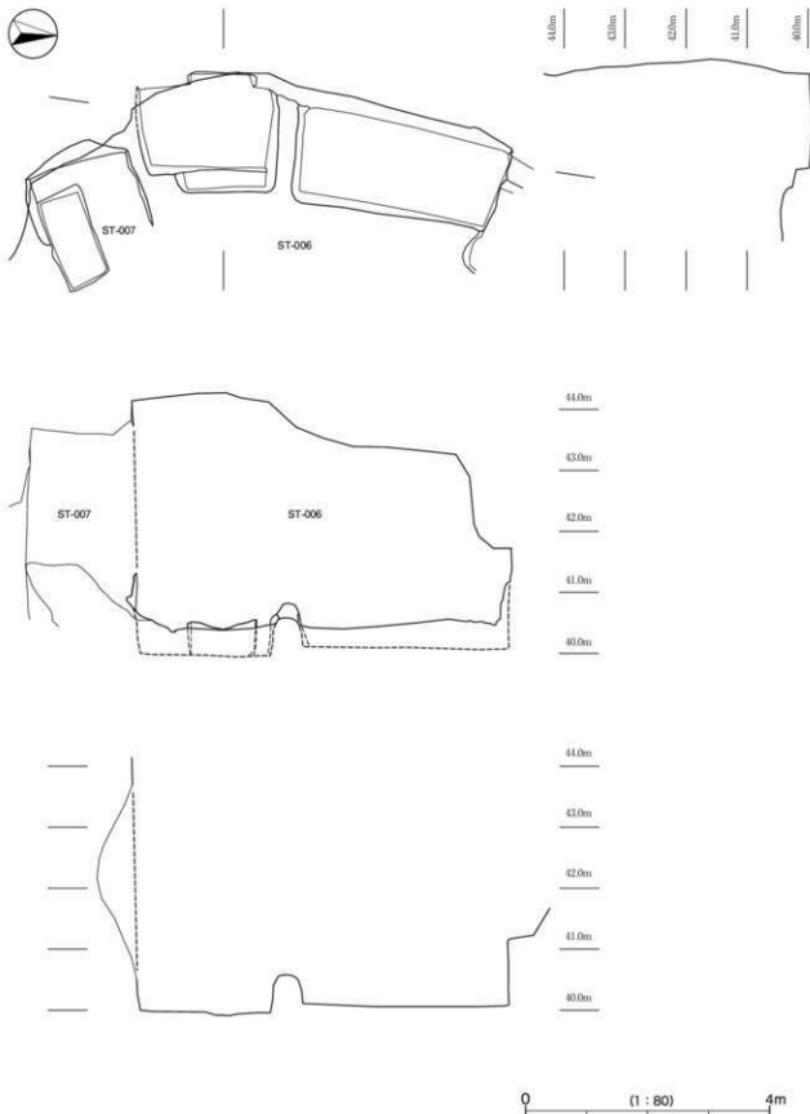
調査の結果、当初観察された岩盤は台地整形の左上の隅で、そこから幅6m 20cm、高さ3m 80cmにおよぶほぼ垂直な崖面が検出された。底面は2基の方形堅穴状に掘り込まれ、向かって左側（東側）が幅2m 25cm、奥行き1m 35cm、深さ70cm、右側（北西側）が幅3m 50cm、1m 60cm、深さ50cmを測り、2基の間は上端幅30cm、下端幅50cmの土手状に掘り残されている。左側の掘り込みには奥壁に幅約1m、奥行き20cmほどの方形の掻き取りがあり、手前側に幅1m 60cm、奥行き40cm、高さ約35cmのステップ状の段がつく。掻き取り部分にわずかに残る工具痕は、ST-004やST-005に類似する。この左側の掘り込みのさらに左からST-007が検出された。ST-006底面の堅穴状の落ち込みは四隅がやや緩やかに掘られているのに對しこちらは隅が角張っており、また主軸方向も異なることから、ST-006とは別に行われた整形であると判断した。

詳細はまとめの項でふれるが、勝藏寺は少なくとも大正期までは常住の寺で庫裏が建っており、その位置は概ねST-006前庭部付近にあたることが調査後に判明した。庫裏は、明治初期の記録では5間半×2間半の規模であったことがわかり、それに伴う何らかの施設である可能性も考えられる。

ST-007・008（第8・9図、図版6）

ST-006の左側から検出された幅1m 85cm、奥行き2mの方形の台地整形痕を、整理作業の段階でST-007とした。この整形には長さ1m 50cm、幅78cm、深さ15cmの長方形の掘り込みが伴う。また、さらに左側には幅1m 20cm、奥行き60cmほどにわたって斜面を掻き取って平坦面を作出している部分があり、こちらをST-008とした。形状や重複状況からみて、同時に行われた整形の痕跡とは考えにくいことから、別の遺構名を付した。両者の新旧関係は不明である。

この2か所の整形も、性格は不明ながらST-006と同様勝藏寺の庫裏との関係が考えられる。特にST-007はかなり整った方形を呈しており、幅も約1間であることから、何らかの建物が建っていたのかもしれない。



第8図 ST-006

3. その他の遺構

ST-003 から ST-006 にかけての前庭部はやや広い平坦面となっており、やぐらの前面を中心に堅穴状遺構 1 基、土坑 5 基、溝状遺構 8 条、小ピットなどの遺構が検出された。これらについて報告するにあたって、第 1 章でもふれたとおり整理作業の段階で遺構番号の整理を行った。新旧の遺構番号の対照は、第 1 表に示した。なお、これらの遺構については個々に図示することはしない。遺構配置図を参照願いたい。

SK-001（第 9 図、図版 3）

ST-005 と ST-007 の間、南北方向に伸びる勝藏寺本堂裏の崖面が西側に曲がる変換点付近で、後述する SK-004 と重複して検出された。調査時には丘陵斜面下部を搔き取って平坦面を造成した台地整形遺構と考えていたが、斜面下端とわずかに重複するのみで斜面の上方までは掘削が及んでいないこと、底面に 3 基～4 基のほぼ同規模のピットが伴うことなどから、整理作業の段階で堅穴状遺構として認定したものである。

南西側の壁で計測すると幅 2 m 35 cm で、そこから 80 cm ほど北東で SK-004 と重複し、SK-004 より北東側では壁は検出できない。覆土はすべて竹根が入り込んでいたため、観察できていない。南隅のコーナー (P-1) と南西壁の中央やや西寄り (P-2) に径 20 cm～30 cm、深さ 10 cm ほどのピットがあり、南隅コーナーから 50 cm ほど内側にも同サイズのピット (P-3) が穿たれる。SK-004 をはさんで 1 m 20 cm ほど北東にもほぼ同サイズのピット (P-4) があり、P-3 と対応するとみられる。これらの位置関係から、全体では一辺 2 m 40 cm ほどの方形のプランが想定される。

SK-001（第 9 図、図版 3）

平成 23 年度の調査で、ST-003 の前面で検出された土坑である。調査時には P-002 と呼称していた。

長軸 1 m 12 cm、短軸 64 cm～81 cm で、北側の壁がクランク状に屈曲しているため、幅は東側のはうが大きくなっている。深さは約 30 cm で、底面はほぼ平坦である。性格ややぐらとの関係は不明である。遺物は出土しなかった。

SK-002（第 9 図、図版 3）

平成 24 年度の調査で、ST-004 から ST-005 にかけての前面で、溝状遺構 SD-001・SD-002 と重複して検出された土坑で、調査時には SK-001 と呼称していた。

長軸 2 m 83 cm、短軸 79 センチの整った長方形を呈し、深さは約 50 cm で底面は平坦である。覆土は全体に橙色の酸化鉄を含む灰色を帯びた褐色土で、上層はやや粒子が細かく、下層はしまりがない。土層断面の観察から、SD-001・SD-002 より新しいと判断した。一見すると寝棺の埋葬穴かのようであるが、長軸が著しく長く、表土の存在を考慮しても深さが足りないように思われる。事実、墓坑であることを示す特徴はなんら見出せなかった。以上のように性格は不明とせざるを得ないが、主軸方向が SD-001・SD-002 と合致すること、ST-004・ST-005 の正面至近距離に主軸方向を直交させて掘り込まれていることなどから、やぐらや溝状遺構とはなんらかの関連がある土坑であろう。遺物は、覆土上層から近世の陶器片が出土している。

SK-003（第9図、図版3）

ST-005の前方、約6mを隔てた位置で検出された土坑である。やぐら前庭部の平坦面から谷津の水田面へ下がる斜面の肩部付近にあたる。平成24年度の調査時にはSK-002としていた。

長軸1m37cm、短軸1m04cmの楕円形を呈し、底面は西半分が円形にやや深く60cm、東側はそれより5cmほど浅い。主軸方向は、概ねやぐら群の主軸方向と一致する。覆土はSK-001と似て全体に橙色の酸化鉄を含む灰色がかった褐色土で、あわせて岩盤の凝灰質砂岩をブロック状に含んでいる。遺物は、近世の所産と思われる平瓦が数点、覆土上層から出土している。土坑の性格などは不明である。

SK-004（第9図、図版3）

ST-005の北側、崖面の裾に沿うように検出された土坑である。長大な長方形のプランを想定して調査を開始したが、結果的には長方形の土坑2基が連続して掘られたような形状となった。2基に分割して報告すべきかとも考えたが、主軸方向を同じくして連続し、北側の壁は共有して連続していることから、まとめて報告することにした。平成24年度の調査時にSK-003としていた土坑である。

全体では長軸5m17cm、短軸75cm～1m20cmの略長方形を呈する。南東側は長軸1m67cm、短軸75cmの略長方形で、南東側はやや不整形となる。北西側は長軸3m90cm、短軸90cm～120cmで、やや北西側が広いが整った長方形である。深さは南東側がやや深く20cmほど、北西側は10cm～15cmである。これらが40cmほど重複して、全体では先に示した規模の長大な長方形をなしている。遺物は出土していない。土層観察面は偶然重複部分にあたったが、覆土は粘性の強い黒褐色土の單一層で新旧関係は確認できなかった。

土坑としての性格は不明であるが、特に北西側のふたつの隅はほぼ直角に角張って掘られていることや、検出された位置から判断すると、ST-006・ST-007と同様にかつて建っていた勝藏寺の庫裏に関連する可能性が考えられる。

SK-005（第9図、図版3）

SK-004の東約3m、やぐら前庭部の平坦面が北東へむかって下がっていく斜面の肩部で検出された土坑である。平成24年度の調査時にはSK-004と呼称していた。

土坑はちょうど斜面の肩部に掘られ、北側は斜面にかかっているため南側の壁しか遺存していない。遺存部から判断すると全体では径約1mの略円形のプランを呈すると思われ、深さは約30cmで底面は平坦である。斜面部の地形を検出している際に、自然に窪んだ地形と認識して掘削したため、土層観察はできていない。遺物は出土しなかった。

SD-001（第9図、図版3）

ST-003の前面からST-004・ST-005の前面をとおってまっすぐ北へ延びる溝状遺構である。平成23年度の調査で、ST-003より南で2条に分岐しているのが確認されていたが、当初は同一の溝状遺構として取り扱っていた。その後平成24年度の調査で、SK-002付近で再度分岐し別の方向に延びることが判明したため、2条の溝状遺構が重複しているものとして遺構番号を分離した。

規模は幅35cm～45cm、深さ10cm前後で、比較的整った逆台形の断面を呈する。南は調査区南端よりさ



第9図 遺構配置図

らに延びて、勝蔵寺本堂の裏手まで連続する模様である。北側は前庭部北側の斜面まで延びて消滅する。検出された長さは約 17 m である。覆土は砂粒や砂ブロックを含み粘性の強い黒褐色土である。

層位による根拠はないが、直線的であることや整った断面形態から、後述の SD-002 より新しい印象を受ける。やぐら群よりは、後世の勝蔵寺の建造物に関連する遺構である可能性も考えられる。

SD-002（第9図、図版3）

ST-003 の南側から SK-002 にかけて SD-001 と重複し、南北に延びる溝状遺構である。重複部分以外は SD-001 の西側に分岐し、裾部をトレースするように崖面に沿っている。南は SD-001 と同様勝蔵寺本堂裏へとさらに延びており、北は SK-002 の北端から崖面に沿って西へ曲がって SI-001 に吸収される。規模は幅 35cm～50cm、深さ約 10cm で、重複部分では SD-001 と底面を同じくする。掘り方の断面形は、SD-001 の整った逆台形に対して緩やかな弧状を呈する。検出された長さは 15 m 弱である。覆土は砂ブロックや酸化鉄粒子を含み、ややグライ化して灰色を帯びた暗褐色土である。

直線的な SD-001 に対し、より地形に忠実で掘り方の緩やかな SD-002 のほうが古いように見受けられ、こちらがやぐら群の構築と関連した溝状遺構である可能性が高いように思われる。

SD-003（第9図、図版3）

ST-004 の前面付近で、SD-001 から南東へほぼ直角に分岐する小規模な溝状遺構である。幅 30cm～40cm、深さ 5cm～8cm で、分岐して 1m 20cm ほどのところで収束している。やや広めではあるが、堅穴住居跡にみられる根太溝に似た特徴を有する。性格などはわからない。

SD-004（第9図、図版3）

ST-005 の前面やや北側で、SD-001 から北西に分岐する溝状遺構である。幅約 30cm、深さ約 5cm、分岐して 1m 50cm ほどで SK-004 の南東端に吸収される。断面は、SD-001 と同様整った逆台形を呈する。SD-001 の東側からは検出されないことから、なんらかの関係があるものと思われるが、詳細は不明である。

SD-005（第9図、図版3）

SD-004 の 40cm ほど北で同じく SD-001 から北西に分岐し、ほぼ平行に延びて約 1m で SK-004 に吸収される溝状遺構である。幅約 40cm、深さ約 7cm と、SD-004 に比してわずかに大きい。こちらも SD-001・SD-004 との関連が考えられるが、詳細は不明である。

SD-006（第9図、図版3）

SK-004 の北東壁の中央付近から東に延びる溝状遺構である。さきにみた、堅穴住居構 SI-001 で推定した方形プランと一部重複する。幅 35cm～40cm、深さは深いところで 6cm ほどであるが、前庭部の北側斜面に向かう緩斜面にあり、SK-004 から 2m 50cm ほどのところで自然に消滅している。詳細は不明である。

SD-007（第9図、図版3）

ST-007 に伴う長方形の掘り込みから発生し、ST-006 の前面をとおって調査区の北端付近で SD-008 と

合流し、調査範囲外へ延びる溝状遺構である。幅60cm～65cmで深さは3cm～5cmと浅く、底面にわずかに硬化した部分が認められることから、道路（通路）として機能した遺構であると思われる。検出された長さは約6mである。ST-007との関連がうかがわれることや位置から判断すると、かつてあった勝蔵寺の庫裏に関連する可能性が考えられるが、確実ではない。

SD-008（第9図、図版3）

SD-007と平行して、ST-006～ST-008の前面をとおる溝状遺構である。南側はSK-004の北西端に吸収されているが、SK-004の南東側に重複するSD-002・SD-004・SD-005との関連はうかがえない。北側はSD-007と合流して調査範囲外へ延びており、検出された長さは約7mである。規模は幅が75cm～1m10cm、深さ3cm～5cmで、一部に硬化面が認められることから、SD-007と同様の道路状遺構であると思われる。

小ピット（第9図、図版3）

上記の堅穴状遺構1基、土坑5基、溝状遺構8条のほか、30基程度の小規模なピットが検出されている。規模はまちまちであるが、径20cm内外、深さ10cm程度のものが多い。柱穴と呼べるような規模のものはなく、掘立柱建物跡と認識できるように並んでいるものも確認できなかった。

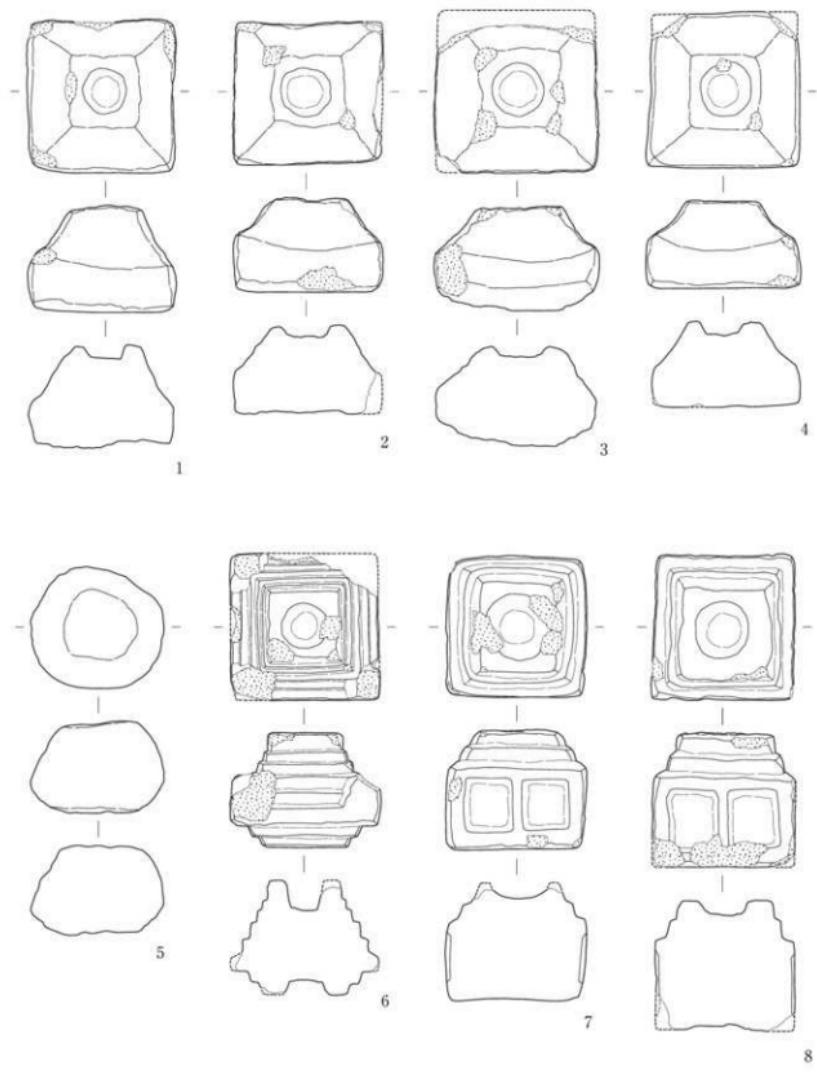
第2節 遺 物

1. 石塔類（第10図、図版7）

今回の調査で得られた遺物は少ない。そのなかで特に重要なのは15世紀から16世紀にかけての所産である石塔類であるが、遺物として得られたのは五輪塔の火輪4点と水輪1点、宝篋印塔の笠1点と基礎2点の、計8点に過ぎない。1・4・7はST-003から出土し、その他の5点はST-003～ST-005の前庭部で表面採集、または表土除去中に出土したものである。なお、勝蔵寺本堂の南東側にある墓地のなかに、五輪塔の火輪と水輪を中心とする数点の石塔類が寄せ集められた場所があることから、往時にはまとまつた数の石塔類が造立されていたと思われる。

1～4は五輪塔の火輪である。いずれも伊豆石と呼ばれる安山岩製で、計測値は1が縦18.9cm、横18.2cm、高さ13.2cm、重さ6.74kg、2が縦17.4cm、横18.2cm、高さ11.0cm、重さ6.03kg、3は縦の残存長18.1cm、推定約20cm、横20.2cm、高さ12.8cm、重さ7.11kg、4が縦19.0cm、横18.2cm、高さ10.6cm、重さ6.21kgである。2～4は扁平なつくりであることから16世紀の所産と思われ、やや背の高い1はやや古く15世紀にさかのばる可能性がある。5は五輪塔の水輪と判断した。かなりいびつな形状であるが、上下を平坦に加工していることから水輪として間違いなかろう。長径16.4cm、短径14.9cm、高さ11.3cm、重さは2.86kgを測る。やや扁平な形態であることから16世紀の所産である可能性が高いが、石材的には15世紀の特徴を持つ6の宝篋印塔の笠と類似することから、当該期までさかのばるかもしれない。

6は宝篋印塔の笠である。石材は伊豆石と呼ばれる安山岩であるが、5の五輪塔水輪とともにほかの6点とは若干異なる特徴を持つ。すなわち、黒味が強く気泡が多く含み、ゴツゴツとしていかにも溶岩といった特徴を示している。気泡が多いせいか、5とともに大きさのわりに軽い。形態は上5段・下2段で、上の最上段はほかの段と比較してやや高さがあるが、窓枠状の輪郭はなく露盤とはいえない。隅飾りは四隅とも完存していないが、輪郭はなく外反せずに直立していることはわかる。15世紀の所産であろう。



0 (1/6) 20cm

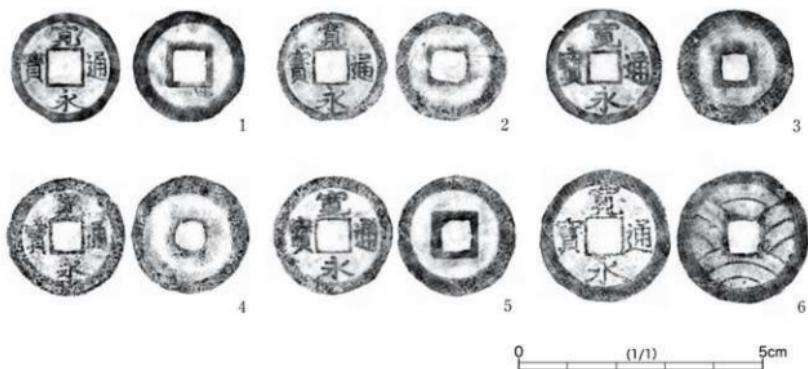
第10図 出土遺物(1) 石塔類

計測値は縦・横 18.0cm、高さ 14.2cm、重さは 4.44kg である。7 と 8 は宝篋印塔の基礎である。ともに伊豆石と呼ばれる安山岩製で、上 2 段、側面は窓枠状に 2 区に分けている。内部は無銘のようであるが、7 は若干凹凸があることから摩滅のために判読できなくなつた可能性もある。7 のほうは若干小ぶりで摩滅が激しく、塔身と組み合わせるほど穴のくぼみかたも鈍い。計測値は縦・横 17.3cm、高さ 14.8cm、重さは 8.09kg である。8 は縦 17.9cm、横 17.5cm、高さ 16.5cm、重さは 9.31kg を測る。

2. 銭貨（第 11 図、図版 8）

銭貨は 6 点出土しており、いずれも寛永通寶である。1～5 は古寛永、6 は真鑄四文銭に分類される。1 は ST-003 から出土した古寛永で、径 22.8mm、重量 2.3 g を測る。2～6 は ST-001 から出土したもので、2～5 が古寛永である。計測値は 2 が径 22.8mm、重量 2.0 g、3 が径 24.1mm、重量 2.8 g、4 が径 24.5mm、3.5 g、5 が径 24.9mm、重量 2.6 g である。4 が他に比してやや重量がある。6 は ST-001 から出土した真鑄四文銭で、裏面が十一波の波錢である。径 27.7mm、重量は 3.8 g を測る。

いずれも埋葬に伴う六文銭とは考えにくく、墓前祭祀に伴つて供えられたものであろう。



第 11 図 出土遺物 (2) 銭貨

3. その他の遺物（図版 8）

ST-003 を中心に陶器片や磁器片が出土しているが、中世までさかのほることが確実なものはなく、ほとんどが近世のもので、なかには近代以降として間違いないものも含まれている。そのため個々の実測図は提示せず、ほかの遺物と一緒に撮影した写真を図版に示した。器種としては磁器のうち茶碗や德利・酒杯などが多く、墓前に供えられることの多いものが主体をなしているといえることから、近世以降にも死者の供養や墓前祭祀が継続されたと考えられる。

陶磁器のほか、丸瓦や平瓦、砥石なども出土したが、いずれも中世までさかのほるという根拠に乏しいため、陶磁器類とともに撮影し、図版に示すにとどめた。

第3章 まとめ

第1節 中世の遺構と遺物

1. やぐら

今回の調査では3基のやぐらを検出した。長生郡内では、古墳時代の横穴からはては近現代の物置・横井戸・防空壕まで、上総層群の堅緻な岩盤の斜面に横穴を穿つことがさかんである。そのため、形状から横穴墓でないことは確実であったが、その時期や性格については確証のないまま調査に着手した。現に、ST-006のように近世以降、もしかすると近現代において改変された可能性のある地形も残されている。ただし、寺院（勝藏寺）境内の本堂背面の崖面に開口していること、その前庭部や勝藏寺の墓地内において中世の所産と思われる五輪塔などの石塔類が散在していることから、やぐらである可能性が高いものとは考えていた。

調査の結果、各遺構の底面からほぼ同規模の納骨穴と思われる土坑が検出されたことから、やぐらと考えて間違いないと判断した。この土坑は、座棺を土葬するには規模が小さく、中世には火葬が一般的であったことから、火葬骨を埋葬した後に五輪塔や宝篋印塔を建て、祀ったのであろう。残念ながら火葬骨や骨蔵器は出土していないが、長柄町内には各地に「埋め墓」と「参り墓」を別に設けるいわゆる両墓制の風習が残っており、やぐら群が「参り墓」であった可能性は十分に考えられる。昭和46（1971）年の東洋大学による民俗調査でも、当遺跡の所在する篠網地区のひとつ東側の谷津である稲塚地区で両墓制の存在が報告されており（東洋大学民俗研究会 1972）、この風習の遠因が中世の火葬に起因する可能性も指摘されている（小高 2003）。なお、本文中にも述べたが、ST-003から出土した近世の陶磁器類は、徳利や茶碗など現在でも墓前に供えられることの多い器種が大半を占めていることから、墓前の供養は近世以降も継続されたとみることができよう。

つづいてやぐらの分布状況についてみてみると、千葉県では君津地域から安房地域にかけての東京湾沿岸に集中しており、太平洋側には鴨川市（旧天津小湊町）の清澄山周辺にやまとまって分布するほかはいすみ市（旧夷隅町）の万木城周辺、御宿町網代湾周辺、勝浦市勝浦湾周辺などに点在しているに過ぎない。財団法人千葉県史料研究財團による県内のやぐら分布調査では、分布の北限が山武郡大網白里町大網に所在する道塚やぐら群、ついで茂原市山崎に所在する山崎横穴群4号址となっており（県史料研究財團 1996）、今回調査したやぐらは北限に近い位置ということになる。大網白里町道塚やぐら群は9基の小規模なやぐらからなり、複数の納骨穴から火葬骨が出土したほか、五輪塔や宝篋印塔、板碑片、かわらけなどが出土している。やぐらの前面からは掘立柱建物跡が検出され、供養施設としての堂の存在が想定されている。時期は14世紀後半から15世紀代と推定されている（山武都市文史 1995）。茂原市山崎横穴群は46基からなる古墳時代の横穴群で、そのうち4号址として報告された1基が横穴をやぐらとして再利用した遺構であった。玄室の底面には納骨穴が穿たれ、宝篋印塔の相輪や笠、五輪塔の水輪や地輪、和鏡などが出土している。時期は室町時代前半頃（14世紀から15世紀）と推定されている（千文セ 1982）。

これらのほか、茂原市久下横穴群では、調査対象範囲の外であるが石塔類を含めた中世のやぐらの存在が報告されており（千教振 2012）、また『長柄町の民俗』の巻頭図版には刑部からほど近い不動地区にある六地蔵の写真が掲載されているが、これをみるとやぐらのような横穴内に安置されており、地蔵像のほ

かに石塔も並んでいる（東洋大学民俗研究会 1972）。長柄町周辺には、今回調査したもののように、15世紀から16世紀という比較的新しい時代に構築された小規模なやぐらが、数多く分布している可能性が高いといえよう。

2. 石塔類

今回の調査で出土または採集した石塔類は五輪塔火輪4点、水輪1点、宝篋印塔笠1点、基礎2点の計8点であるが、本文中でもふれたとおり、これらはST-003から出土したものと前部から採集したもののみで、勝蔵寺の墓地内には寄せ集められた状態のものがさらに数点残っている。

勝蔵寺周辺に限らず、一宮川流域は15世紀から16世紀にかけての銘のない小型の五輪塔や宝篋印塔が多く分布する地域であり、下流から榎本 - 徳増 - 鶴谷 - 金谷 - 刑部と、点在する流域の集落に沿って寺院境内や共同墓地内に多数確認することができる。この分布は最上流部まで及んでおり、金谷字吹谷の共同墓地内には積み方も正しくひと揃いの五輪塔が現存するという（小高 2003）。これら石塔類の分布は、各集落の起源とも大きく関わっている可能性がある。

なお、出土した部位であるが、特に五輪塔では火輪が4点みられるのに対して空・風輪や地輪は皆無であり、宝篋印塔も相輪と塔身は出土していない。これは、五輪塔の地輪や宝篋印塔の塔身は方形であるため建物の礎石などに転用されることが多く、また五輪塔の空・風輪や宝篋印塔の相輪はその形状から道祖神などのご神体として再利用されることが多いためという指摘がある（小高 2003）。「長柄町の民俗」の巻頭図版に徳増地区の道祖神の写真が掲載されているが、そこには宝篋印塔の相輪とみられるもの1点と五輪塔の空・風輪とみられるもの2点が写っている（東洋大学民俗研究会 1972）。

第2節 刑部地区の中世後期の景観

最後に、やぐらが構築されたと思われる15世紀から16世紀にかけての、周辺の景観についてふれてみたい。

まず勝蔵寺についてであるが、建立時期は不明ながら、昭和46（1971）年の民俗調査で、本堂のはぞ木に享保11（1726）年に建て替えが行われたことが書かれていることがわかっている（東洋大学民俗研究会 1972）。檀家総代の神崎氏も「徳川吉宗の頃にはすでに寺があったらしい」と話しておられたが、この記録から判明したのであろう。この時期に建て替えが行われたとすると、少なくとも江戸時代の前半期には建て替え前の本堂が建っていたことになる。また同じ調査時、千葉県総務部学事課に保管されていたという明治10（1877）年頃の社寺調査簿には、由緒は不詳ながら「延宝元年正月法印存海中興開基」とある（永井 2002）。延宝元（1673）年は先の建て替えの47年前にあたることから、第1回目の建て替え時期としては矛盾がないといえよう。さらに『長柄町史』によると、文禄3（1594）年に太閤検地が行われた際、検地帳とは別に覚え書きとして書かれた『上総国長南領刑部郷御繩打之水帳』のなかに、分附百姓として勝蔵寺（正蔵寺）の名前が記載されているという。分附百姓とは、土地は所有しておらず名主に服従している立場であるが、検地帳には登録されない第二次的從属百姓を抱えて大規模な農業経営を行った百姓をさすことから、中世末期にはすでに複数の百姓を統括する立場として存在していたことになる。

一方、長柄町刑部地区を含む旧上総国長柄郡刑部郷は中世前期以降上総鎧物師の拠点となつたことで知られている。これは、鎌倉時代の前に鎌倉長谷の大仏铸造のために関東へ来訪した畿内河内国や大和国の大鎧物師が、そのまま帰らずに関東に残り刑部郷を拠点としたとされる。その理由は、笠森寺などの巨刹

が点在し仏教法具の需要が多かったことや、砂鉄・粘土・砂・木炭といった原材料の調達が便利だったことなどが考えられている（市村 1991・1994）。本文中でもふれたとおり、周辺には鉄の铸造や鍛造に関連すると思われる小字名が多数残されており、詳細不明ながらスラグなどの関連遺物を出土する遺跡も複数知られている。金石文の調査などからは、刑部郷を拠点とした上総鑄物師は近世にも操業を続けていたことがわかっている。これらの集団と、やぐらや石塔類を残したムラとの関連は不明であるが、なんらかの関わりを持っていましたことは間違いないところであろう。

刑部地区の特徴としてもうひとつ、古代以来長柄・埴生・夷隅の郡家と上総国府を結ぶ交通の要衝であることがあげられる。まさに現在の県道市原茂原線のルートであり、中世においても長南武田氏の居城長南城やその周辺の支城から東京湾岸へでるためのメインルート上にあたる。そのため、16世紀には番城としての刑部城（後領遺跡）が築かれたりしたのである。後領遺跡の報告書では、「市原の市西方面から茂原へ抜けるルート上の要地、それも自然の川を橋として市原方面に対している点に当城の性格の一端が窺えるが、それは刑部から一宮川を約4.5km遡った（ママ）中流域にある小榎本の要害城と年代・構造ともに対応する。要害城が一宮川流域における北東の要とするならば、この刑部城は北西の要といえるかもしれない。」としている（千振 2008）。刑部城跡の年代は16世紀後半が想定されており、今回調査したやぐら群や石塔類よりは若干新しい時期の構築であるが、城が営まれていた時期に至近のムラではこれらの葬制や墓前祭祀が継続されていたとみることができ、やはりなんらかの関係はあったことであろう。

第3節 遺跡の名称と横穴群

今回の調査では、古墳時代の横穴は検出されなかったことから、「刑部勝藏寺裏横穴群」という遺跡名称を使用するべきか変更するべきかという議論が何度もあった。名称が遺跡の実態を表していないことが原因であるが、事業地外とはいえ調査対象範囲の隣接地には間違いなく横穴が所在することと、現地踏査から新発見の遺跡として周知するまでの経緯から、千葉県教育庁教育振興部文化財課では変更しない方針を決定した。なお、隣接地の横穴の所在する範囲は現在の周知範囲には含まれないことから、今後範囲変更の手続きが必要となる。

横穴は勝藏寺本堂背後の丘陵の先端部、標高約38mの崖面に5基所在する。丘陵先端は、一宮川と県道市原茂原線に面して緩やかに内湾するような形状を呈しており、その中央付近に3基、東にやや離れて2基が開口している。東側の2基の背後は、狭小なやせ尾根を介して勝藏寺の墓地と隣接している。なお、第1図に示した横穴の位置は現地での目測に基づいており、実測したものではない。横穴の前部は比較的広い平坦面となっているが、現況は放置された竹林で真竹が密に繁茂しており詳細な観察は困難な状態で、写真も提示することができない。そのような状態のなかでの観察結果では、中央の3基は比較的残りがよく、うち1基の奥壁には後世に転用・再利用されたためか方形の掻き取りが観察できた。

また、第1章でふれたとおり丘陵上の先端部付近には径約5m、高さ1mほどのお椀を伏せたような形状の高まりが存在する。この高まりは位置的に中央の3基の横穴のはば直上にあたるようで、横穴の上方に築かれた墳丘である可能性がある。

この横穴群と墳丘状の高まりの所在する丘陵は、県道市原茂原線改良工事によって開削された後には先端部のみが島状に残ることになる。刑部勝藏寺裏横穴群の保全という観点からも、今後はより慎重な取り扱いが要求される。

参考文献

- 市村高男 1991 「中世房総における鉄物師の存在形態」「中世房総の権力と社会」高科書店
- 市村高男 1994 「二 中世の鉄物師の集団と集落－東国（関東八カ国）を中心として」
「中世を考える 戦人と芸能」網野善彦編 吉川弘文館
- 井上哲朗 1991 「房総半島における「やぐら」の存在形態」「中世房総の権力と社会」高科書店
- 小高春雄 2003 「中世の長柄を考える」「長柄の歴史」第四集 長柄歴史同好会
- 小高春雄 2011 「長柄・長南の古塔二例について」「房総の石仏」第21号 房総石造文化財研究会
(財) 山武都市文化財センター 1995 「道塚横穴・ヤグラ群」
- 千葉県教育委員会 2012 「千葉県船山市千手院やぐら群－千葉県やぐら調査報告書－」
(財) 千葉県史料研究財團 1996 「千葉県史編さん資料 千葉県やぐら分布調査報告書」
(財) 千葉県文化財センター 1982 「茂原市山崎横穴群」
(財) 千葉県文化財センター 1994 「房総考古学ライブラリー 8 歴史時代（2）」
(財) 千葉県教育振興財團 2009 「住宅市街地基盤整備委託（埋蔵文化財調査）報告書－市原市新巻遺跡群－」
(財) 千葉県教育振興財團 2008 「主要地方道市原茂原線（刑部・金谷）道路改良事業埋蔵文化財調査報告書
－長生郡長柄町後領遺跡・市神道路－」
(財) 千葉県教育振興財團 2012 「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 18－茂原市久下横穴群－」
東洋大学民俗研究会 1972 「長柄町の民俗」
永井義憲 2002 「長柄の文学・文化 地名・屋号および寺社」「長柄の歴史と文化」
長柄町史編纂委員会 1977 「長柄町史」長柄町

写 真 図 版



図版 2







ST-003 近景（東から）



ST-003 底面



ST-004・005 近景（東から）



ST-004 底面

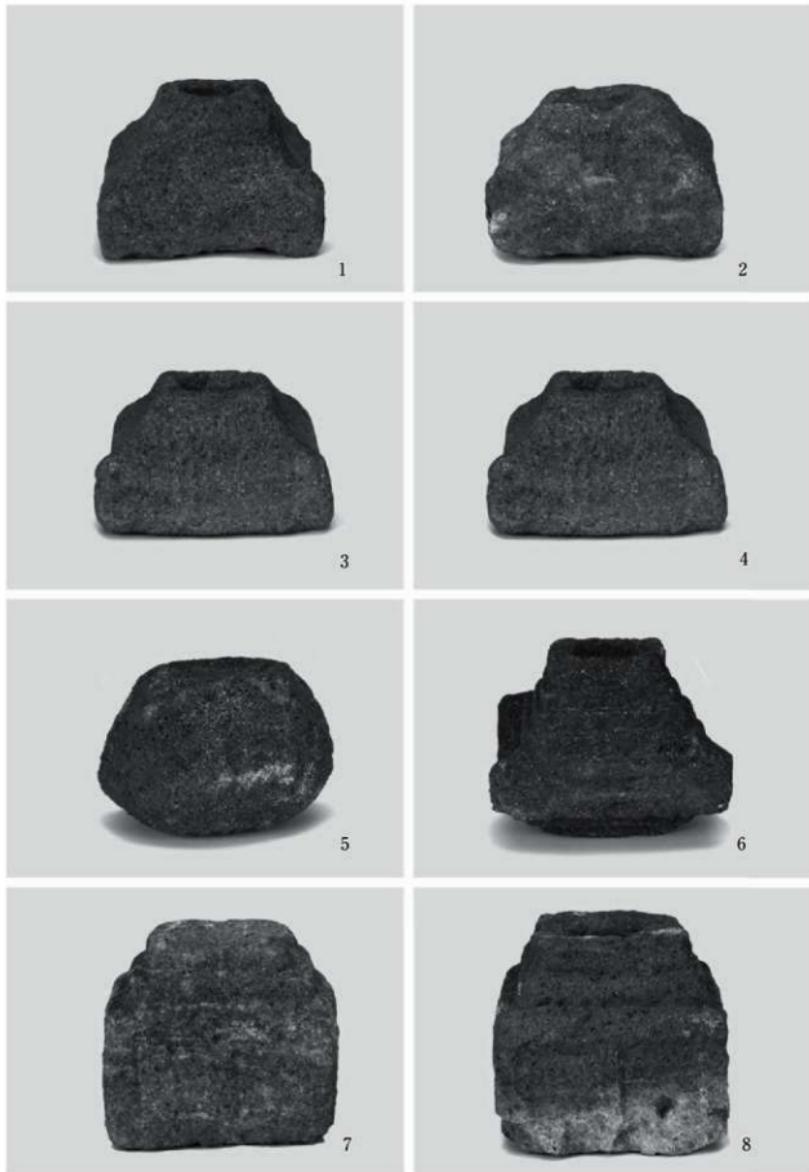


ST-004 左側壁閉塞施設？

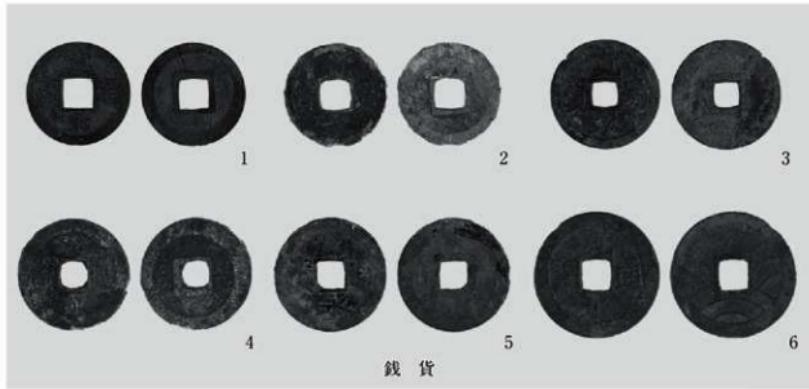


ST-005 底面





出土遺物 (1) 石塔類



出土遺物（2）銭貨・その他の遺物

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第690集

長柄町刑部勝藏寺裏横穴群
—地域自主戦略交付金（道路）委託埋蔵文化財調査報告書—

平成24年9月30日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文 化 財 セ ン タ ー

発 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397